



音楽は、コミュニケーションの手段として生まれた。それは、感性を表現するもっとも原始的なアートといえるかもしれない。

いま、わたしたちにとって、アートを通して時間を消費することは最高のぜいたくだし、そういう機会を多く持てるのが、地域の文化レベルの高さでもある。たとえば、ホールでコンサートを聴いたり、能楽堂で能狂言を鑑賞するように。これは、音楽の創り手と聞き手がコミュニケーションを通して、ノリを共有できるからである。

でも、日常生活のなかにある音楽を考えると、テレビやラジオ、商店街の有線、はては信号機のピーポーなど、一方的に否応なく音楽を浴びてしまっている。ここには、双方向の自由なコミュニケーションのカケラもない。

江戸時代の人たちは、かすかに聞こえる鐘の音に、季節や方位や時刻を感じ取ったという。わたしたちも、そんな澄んだ耳を取り戻したい。

そして、自由な音楽のコミュニケーションを楽しみたい。

そのために、わたしたちができることって何かな？ 湖北にも、そんな音楽の機会があるんっちゃうかな？ みんなで音楽しながら探してみよう。

## 座談会

# 湖北をサウンドなまさに

長浜市が募集した新博物館都市構想の懸賞論文で、優秀賞に輝いた『サウンド・シティ・ながはま』。この論文では、いまの長浜のまちに音楽がもつと息づいていれば、なお楽しいまちになるんじゃないかと、具体的なプロジェクトが提唱されています。

そのなかのひとつでも、わたしたちの手で花咲かせることができないだろうかと「みーな」は考えました。そこで、湖北で音楽活動を続けておられる方たちを集まっていただき、論文を書いた三和さんを囲んで座談会を開きました。

♪練習場所が見つからない……

まずは三和さんから、論文の前身をご紹介いただけますか。

三和 今の長浜は、渋いまちになっているなと思うんです。若者にとっては、いまひとつ刺激がない。そこで、音楽を核にしているんなことをやっていきたいなというのを書いたものなんです。

僕はドラムをやっていたんですが、練習場所や、発表する場として、ライブハウスができればいいなあという思いから、あそこへいけば何かをやっているという場所をつくりたいというのがひとつ。ソフトの面では、一年を通して音楽の楽しめる行事ができればいいなあと思っています。

——そして、見に来る人があればもっといいなあ、というところですね。

練習場所がないということですが、バンドなどは特に大変でしょう。

丸本 今はびわ南小学校の旧体育館で練習しているんですけど、そこに至るまでには、他の利用者との兼ね合い、利用できる時間帯や料金、防音問題などがあって、あっちこっちを転々としていたんです。

——その点、内藤さんは恵まれていますね。

内藤 うちの場合は、自分の家の二階が練習場所、隣近所がないという……（笑）

宇野 ぼくらは虎姫の松岡電器さんところで、スタジオ代に、夜は一時二五千五百円かかるから、個人の練習は家でしつかりやってきて、スタジオでは合わすだけにしてる。コー

## 出席者(アイウエ順)

- |        |                              |
|--------|------------------------------|
| 宇野季之さん | ロックバンド『SLVM』のドラマー            |
| 桐畑秀郎さん | 福井の大学に在籍中。アコースティックギターによる弾き語り |
| 津田敏之さん | ブルーグラスバンド「サウズオブリーン」のバンジョー奏者  |
| 内藤悦子さん | 『ベビームーン』ボーカル                 |
| 丸本克弥さん | 長浜北高ブラスバンド部部長。編成する楽団がたがのメンバー |
| 三和伸彦さん | 受賞論文執筆。バンドではドラム担当だが、現在休止中    |

ドが分からんとかいうのはナン！ぼくの場合はドラムなんで、自宅ではイメージトレーニングだけです。

でも、スタジオがひとつしかないから、土曜日曜なんかはとも混んではるんです。

三和 夜に練習したくても、遅くまで使わせてもらえないところがありませんね。

宇野 近江八幡まで行かんとないなあ。

津田 それはちょっとしんどい。ぜひ、長浜にひとつできればいいですね。

宇野 でも、ただ音が出せるという環境をつくるだけでなく、楽器のメンテナンスなどできる人が経営しないと、利用者が少なくて採算が合わんということになりますから。

——桐畑さんは、どうですか。

桐畑 練習は内藤さんのところでお世話になっ

# サウンド・シティ・プロジェクト

(新しい長浜文化への出発)

三和伸彦

- 一、はじめに(略)
- 二、長浜の現状についての考察と課題

- (一) なぜ長浜は変わったか(略)
- (二) これから求められるもの

まちづくりの主役は、言うまでもなくそこに住む人自身である。今まで述べてきたように長浜の変化は、多くの市民の意識を変えることに成功した。

しかし、新しい長浜を考えるとき、十代、二十代の若者の感性がもっともと生かされる街になることが重要である。今の長浜に欠けているものがあるはずば、それは、若いエネルギーであり、それを生かせる場所であると私は考える。

以下に私が提案する「サウンド・シティ・プロジェクト」は、そうした若いエネルギーを生かすための具体案であり、従来のまちづくりにこうした視点を加えることによって、よりバランスのとれた長浜が、新しい長浜文化が生まれると確信している。

なお、サウンド(Sound)という語には、「音」という意味の他に、「健康な」あるいは「健全な」という意味があり、「サウンド・シティ・プロジェクト」とは、長浜の健全な発展という意味も込めて名付けたものである。

## 三、サウンド・シティ・プロジェクト

### (一) コンセプト

若者文化の象徴、それは「音楽」である。音楽はい

つも身近なところにあって、いろいろな刺激を与えてくれる。

しかし、今、湖北、長浜周辺の若者たちの音楽文化を取り巻く状況には、非常に寂しいものがある。

サウンド・シティ・プロジェクトは、音楽に情熱を燃やす若者を中心とした多くの音楽を愛する人々に、ハード、ソフトの両面から支援を行い、新しい、長浜文化の創造に資するものである。

### (二) ハード・プロジェクト(環境づくり)

音楽の好きな人には大きく分けて二通りある。「音楽をすること」が好きな人と、「音楽を聴くのが好きな人」である。今の長浜には、そのどちらの人も満足させられる施設環境が整っていない。以下に、必要と考える施設等についての具体案を述べることにする。

#### (ア) 練習場所の確保

音楽をやりたい人にとって、最も問題となるのが、練習をする場所である。現在、市内にはいわゆるレンタルスタジオの類は皆無である。ちなみに私はかつてバンド活動をしていたことがあるが、主な練習場所は、メンバーの農機具小屋(びわ町)であった。文化を醸成させるためには、そのための場所が必要である。

#### (イ) ステージを設置

そんな湖北にも地道に活動を続けているグループがいくつもある。しかし、その成果を発表するステージが無い。

「そこへ行けば音楽ができる。聴いてくれる人がいる。」

そんな若者文化の発信基地として、ライブハウスのな施設が必要である。黒壁スクエアの一角に、例えば、ライブスポット・B-Wall(この名前は既に施設施設で使われているが)なんていう施設があれば、素敵だろうにないかと思う。(以下、この施設を表す場合「B-Wall」と呼ぶことにする)

#### (ウ) 情報発信基地の設置

上のステージのところでも若干触れたが、音楽に対する欲求を満たすためには、情報が必要であり、そうした情報が集まる場所、あるいは発信する場所としての機能を持った施設(場所)が必要である。新しい長浜の象徴として「黒壁」があるように、若者の文化の象徴として、「B-Wall」にそうした機能をもたせることも必要と考えられる。(プレイガイド、コンサート情報、etc)

#### (エ) 既設施設の有効利用

同時に、既設のさまざまな施設を有効に使うことも考えるべきである。

黒壁の成功の一因は、それが、昔から長浜にあった建物であること、長浜のにおいがしみついてきたことにあると思う。(その意味では、B-Wallの建物としては山蔵が最もふさわしいと思われるのだが)

また、市民会館や文化芸術会館、臨湖などといったホールをもっと有効に、使いやすくする工夫が必要である。

また、湖北に目を広げると、米原町の文化産業芸術会館(特に小ホール)や木之本町のスティックホールなどのすぐれた施設があるが、特に木之本などは、アクセスを含めて工夫の余地が残されている。

### (四) その他

ハードプロジェクトを進めていく中で、当然これに関連したさまざまな商店をはじめとするサービス施設の整備も必要となってくる(楽器店、音楽関係書籍の

店、レコード店、飲食店等)。B-Wall周辺の施設整備の際にはこれらの進出も見込んでいくことが必要となろう。

### (三) ソフトプロジェクト

施設を整えることは、第一段階であり、本当の文化が生まれるかどうかは、そこにどんな魂を吹き込むか、その点にかかっている。(中略)

#### (ア) アーティストの招へい

定期的に内外のアーティストを、長浜に呼ぶ。最低週に一回はどこかでライブが行われている。そんな状況ができれば、おそらく、アマチュアのレベルは一気に上がるであろう。これは、音楽にとどまることなく、いろいろな分野の芸術活動に刺激を与えるだろう。

#### (イ) 年中イベントの開催

●BSヤングバトル等、全国規模の音楽コンテストの全国大会の開催……会場としては、長浜ドームがもっともふさわしい。(開催時期)五月ゴールデンウィーク

#### (ウ) ミュージックキャンプの開催……例えば、大学の軽音楽部の合宿に对应できる施設を整備しておいて、(黒壁二十・二十五号館くらい)夏休みをミュージックキャンプ期間とする。打ち上げは、B-Wallでのライブとする。(七月)

#### (エ) ミュージック・クリニクの開催……著名ミュージシャンを講師に招き、楽器、ポーカーのレッスンを行ってもらう。(八月)

#### (オ) 文化祭バトル……文化祭のバンド発表の場を提供する。日替り学校対抗などもおもしろいと思う。(十一月)

#### (カ) グラジュエーション・ライブ……高校等の卒業時

には、現在でも記念ライブが行われているが、これを中心に行事化する。(三月)

文化は、市民がつくるものであり、あくまで自主的な運営、開催が望ましい。ただし、財政面等で行政や企業のバックアップが必要となる場合もあるだろう。その受け皿としてのシステムづくりの検討も必要であろう。

#### (ウ) F.M局の開局

B-Wall内にF.M局を開設し、音楽を中心とした情報を発信する。

#### (エ) その他

音楽関係イベントのほか、例えば、演劇関係の利用についても広く受け入れて良いと考える。

## 四、まとめ

以上、今までの経緯を踏まえながら、これからの長浜のまちづくりへの提案を行ったが、ここでは、このプロジェクトを、誰がどんなふうに進めていくのかまでは言及していない。

実は、その部分が、あるいはその過程そのものがまちづくりではないかと私は思う。

上からのお仕着せではない自分たちのまちづくりこそが、今、求められている。

サウンド・シティ・プロジェクトによって、●古くて新しいまち、●静かで活気のあるまち、●訪れたい、住んでみたいまち、などといった、普通なら相反するよう思えるイメージが似合う、バランスのとれた「サウンドな」まちが出来上がっていくに違いない。そして新しい博物館都市構想の下、長浜の新しい文化は若者のエネルギーが生み出していくのである。

(紙面の都合上、一部簡略化しています)

